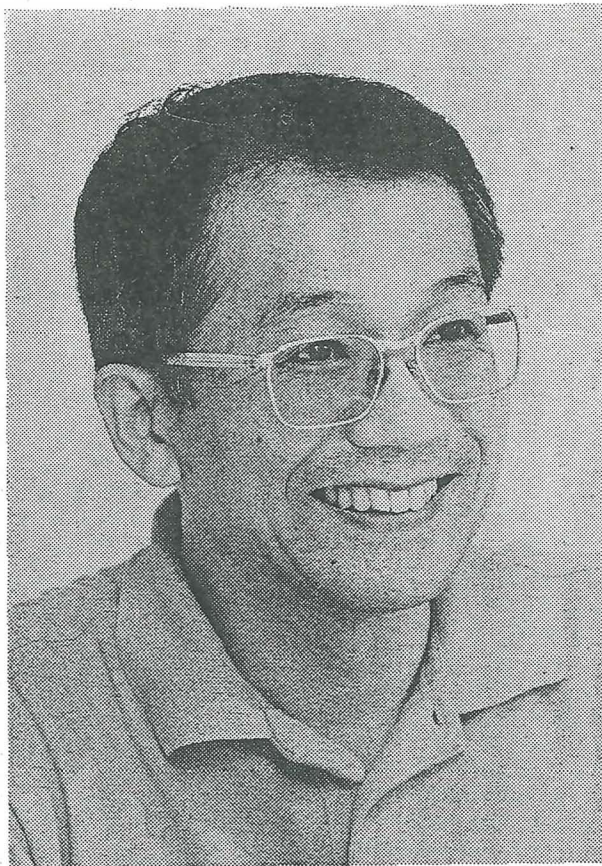


本当の「遊び」を 子供も親も知るべきだ



社会学者

橋爪 大三郎さん

<はしづめ だいさぶろう>1948年、神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。東京工業大教授(社会学)。著書に「はじめの構造主義」「言語ゲームと社会理論」「冒険としての社会科学」「性愛論」「現代思想はいま何を考えればよいのか」「オウムと近代国家」など。

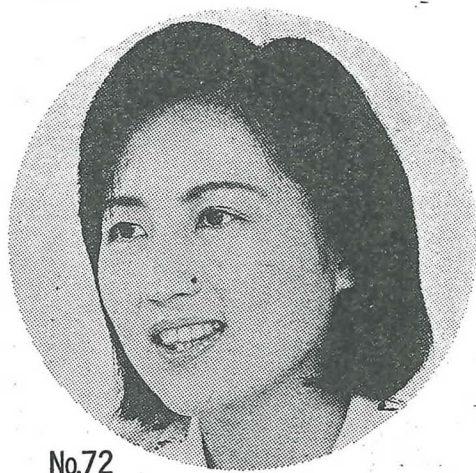
も含めて、普通の人にそれを要求したのです。同じ殺人でも、時代によっては、むしろ義務として奨励される場合もあったわけですね。
宮崎 でも、相手がまず自分の親を殺したという大義名分があるわけで、何の罪もない者を狙うのとは、意味が違いますか？
橋爪 言いたいのは、普通の少年だつて状況次第では人の首を切つて殺すことができる、人間とはそういうものなの

のだということ。宮崎 人間の可能性からいえば、彼の行為も十分ありうることだ。橋爪 そうです。しかし、人間とはそういうものだと、ことを知っているべきなのに、日常生活では往々にして忘れ

てしまう。私たちに反省すべき点があるとすれば、そこだと思えます。なぜ、そうなるかといえば、学校教育や社会が、人間を予測可能な枠に押し込めてしまっているからなんです。宮崎 なるほど。

トもあるようですね。橋爪 いま学校は秩序整然とした世界になっています。本来、生徒はふぞろいのリングのはずなのに、みんなそろってちゃってわけですね。フアッシュンも、見るテレビ番組もだいたい同じで、違いがあつても、渋谷系だとか、分類可能な違いではない。ところが、家に帰つて自分一人になったときに沸き上がってくるものがある。昼間の、外側から大人や教師や社

宮崎 緑の 斬り込みトーク



No.72

意外性のない世界が広がる

宮崎 神戸の少年による殺人事件に象徴されるように、従来の常識を超えるような犯罪が相次ぎ、社会の仕組みの根底にかかわるような経済事件も続いています。この「いま」という時代を先生はどうとらえていらっしゃるんですか？
橋爪 本日に、妙な事件が続きますねえ。一昨年にはオウムの事件もありました。そのため、今後ますます意外なことが起こり、自分も巻き込ま

れたらどうしようという不安を皆さん抱いているかもしれません。けれどもそれは、大部分の人が、むしろますます意外なことなど起こらない世界に生きるようになっていくということなのです。宮崎 どういうこと？
橋爪 O157の騒ぎがありました。それは、寄生虫もいなくなり、食中毒も減り、衛生的に管理された空間が広

がったことの裏返し。同じように、世の中はますます清潔になり、管理され、将来が予測しやすくなつてきています。そういう情報があふれているのだから、小学生でも「自分の人生はこんなものだ」と夢のない台詞を口にするわけです。そういう下地があるから、予想外のことが起きた場合に必要以上に動揺してしまうのです。宮崎 無菌状態だから、過剰な反応が起こるのでしょ

うか、たとえば神戸の事件でも、橋爪 あのような事件に驚くのは当然のことです。でも、考えてみればやはり例外的な事件であつて、同様の事件が

から、今の時代と関係ない犯罪、とも言えると思えます。けれども、そのやり方は新しいのではないかな。宮崎 殺し方がですか？
橋爪 彼は最初からマスコミに報道されることを念頭に置いて行動しました。世の中を騒がせることで自分の存在証明をしようということでしょう。そういうことは普通は大人がやるんです。宮崎 いまの子供は、それだけ情報化社会に生きていくということなのでしょうね。橋爪 ええ。次に、彼が「大変、突飛な子供かどうか」という問題ですけど、人間はどことまでいっても人間ですから、人間の可能性の範囲でしか行動できません。人を殺すのも、残酷なことをするのも、人間なればこそです。ただし子供は、大人ならばやらないことまでやってしまうということ、は、まあります。江戸時代に仇討ちというのがありました。仇討ちは殺人です。大人を殺して、できれば首を切つて持って帰らなくてはいいなかった。少年少女

20代の若者による短絡的な殺傷事件や、通り魔事件、そして中学生による神戸での連続殺人事件。不可解な事件が全国で相次いでいる。これは、たまたま同時期に起きたにすぎないのか、それとも何か共通する原因があるのか。だとすれば、この国は何を改めるべきなのか。社会学者の橋爪教授に聞いた。



ば、「遊び」です。遊ばない子供は生きていきません。もともと子供は放っておいても遊ぶものではありますが、その中身が問題なんです。

宮崎 今の子供は、おもちゃや道具がないと遊べないとか言われていますね。

橋爪 ええ。本来は子供たちで集団をつくって、大人が見ていないところで時間無制限で遊ぶのが正しいんです。でも、そんな場所も機会もなくなり、大人の目の届くところで、テレビゲームとかサッカーとか、ルールを与えられた特定のゲームをしているわけです。要するに管理されているんです。

遊びの持つ創造性、野放図さ、意外さとか危険さとか、子供の時に体験しておくべきものを体験せずに大きくなってしまうわけです。

宮崎 私も今の子供は不憫に思うのですが、どこでどんな目にあうかわからないこのご時世では、難しいですね……。

橋爪 外で自由に遊んでいた世代の親は、遊び本来のおもしろさを自分の子供らに味わ

せてやれないという、うしろめたさを多少は持っています。けれども、それ以後の若い親にとつては、管理された中で遊ぶのが当然のことなんです。それがなかなか困りものですね。

宮崎 どうしたら、いいんでしょう。

橋爪 大人がまったく見えない場所で長期間にわたって延々と遊ぶ、ということをせひ小学校低学年の間で制度化してもらいたいと、私は提案してらるんです。

仮にそういうチャンスを子供たちみんなが持つていたとしたら、神戸の事件について「気持ちちは分かる」という少年たちの比率はぐんと下がるのではないかと思います。これは直感なんです。

宮崎 たしかに、何もない空間に放り出された時に、遊べるかどうかというのは、大きなテーマでしょうね。

橋爪 もうひとつ気がかりなのは、いまの大学生たちを見てみると、同年代の青少年と普通に話す力が非常に落ちてきているように感じます。



い、子供に良い教育を受けさせたい」と思うのが普通です。生活レベルの均一化は同じように進みます。そこまでは世界共通です。

宮崎 日本の場合は、それに独特の文化がプラスされるのですか？

橋爪 他人との違いをプラスに評価するか、それともマイナスに評価するか、という文化の差がありますね。これは昭和30年ごろに日本人が社会のつくり方を失敗した、その災いが今に及んでいるという面があると思うんです。

たとえばアメリカの小学生は、他人と違うことがいかに大切であるか、まず教わります。子供たちも少しも他人

ひどい事件の起る世の中に

やはり、自分を出すことについての恐れによるものでしょう。

対人恐怖的なものは、自我が固まりかかるところの人にはよくあることです。昔の若者にはそれを乗り越えなければいけないという自覚もあつたと思います。今は、そういうことをまったく考えたこともないようなタイプの人が増えている気がします。

宮崎 さきほど先生はひどい世の中にはならないと言われましたが、おどろおどろしい事件の頻度は高まっているように思うのですが。

橋爪 ひどい世の中、ではなく、ひどい事件が起る世の中というのでは、そのとおりでしょう。通り魔や放火は模倣犯が出やすい反面、時

が過ぎれば収まるものです。しかし、模倣ではなくて、同じメカニズムが作用して繰り返す事件が起る、というのはありうるし、放っておけばもつとエスカレートした次の形が出てくるような気がします。

宮崎 どこを直せば食い止められるのでしょうか。

橋爪 私は、日本人はもつと個性化したほうがいいという立場で発言してきましたが、それは痛しかゆしなんです。宮崎 個性化はいいことじゃありませんか。

橋爪 アメリカであれだけ犯罪が多いのも、犯罪にアイデアンティティーをもっている人間がいて、どんなに残酷な手段で新しい犯罪をするか競いあっている面もあると思います。日本も個性化すると同じように犯罪社会になるかもしれない。日本人が十分に个性的になり、しかも犯罪を起こさない、というのが理想です。その方法をなんとか考えていきたいです。

宮崎 日本人の横並び意識がいろいろな悪弊の原因だとい

会が見ている自分と、自分だけが知っている自分とは違う。ギャップがあるわけですね。そういうことはどんな青少年にも必ずあるでしょう。

宮崎 それは大人にだってありますよ。

橋爪 それでも昔は、どちらの自分も結局は自分なんだと、自分の内面に自信が持てたと思うんです。メディアもそれほど発達してなくて情報も少ないから、自分の仲間うちで生きたいわけ、友だちとの関係の中で折り合いをつけていけばよかった。

けれども、いまは、平均的な若者像というのを、大人も自分たちも信じているわけです。そうすると、仲間はずれ

になりたくない圧力がますます大きく働くんです。

宮崎 たしかに今の若者は枠組みにはまって、その流行に左右されやすくなっているような気がしますね。

橋爪 そうなると、どうも自分は人と違うのではないかと、何か奇妙な存在ではないか、という恐れや疑念を抱きやすくなるんです。

女性が拒食症になるのは、体重やサイズが標準からはみ出しているのではないかと、不安が原因でしょう。男性にも、いろいろなコンプレックスがあるけれど、なかには自分の攻撃性や残酷さに逃げ道を見つかる人も現れるかもしれない。

均一化の圧力は子供ほど強烈

宮崎 若者に限らず、この国は横並び意識が強い社会だと思います。他人とのかかわりの中で相対的に自分を位置づけていこうとする力というのは、この国特有のものなのか、それとも、いまの人類に共通するものなのでしょうか。

橋爪 両方あると思います。まず共通する面からいうと、どんな産業社会も、ある段階になるとホワイトカラーが増えてきます。均質化が進んで、みんなが中流意識を持つようになる。所得が上げられれば、「世間並みの生活がした

と違うところがあると自慢をするし、人と違うところがないと悪口を言われます。

一方、日本では、自分の意見を言えば、ほめられることになってはいるけれども、実は後ろ指さされたりする。子供のうちにそれを学習してしまつて、積極的に発言したり、行動しなくなるわけです。

宮崎 いじめ問題の根っこも同じなのでしょうね。

橋爪 大人は、そうではなかった時代のことをかろうじて知っているんです。けれども子供はいまの時代しか知らないから、均一化の圧力は大人よりもずっと強いでしょう。

宮崎 その世代の線引きはどこで引けるのでしょうか。

橋爪 貧しさの記憶があるかどうかですね。いまの35歳ぐらいよりも下の世代は物質面でそう苦労はしてないでしょう。で、その人たちが人の親になつていきます。もう永遠に「いま」みたいな気がしているのかもしれないですね。戦前、戦中の飢餓の話がされても実感がありません。よその国のこのような気がする。

ただ、世の中はそういう方向に進むものですから、若い者はもの大切さを知らない日本人の美徳を失った、と嘆くのは半分しか正しくない。

宮崎 ああ、環境が違うとねえ……。

橋爪 教育があり、消費文明に適應しているし、いい点もあるわけです。何が失われていくかということについて鋭いセンスを併せ持ちながら、いまのこの社会の中につかり場所を見つけていく、こういう考え方をとつていけば、いいと思うんです。

宮崎 それは難しくはありますか？

橋爪 具体的に何が必要かという、子供に関していえ

うのはよく指摘されるどころですが、それを崩すと治安が悪くなるというのは、困ってしまいますね。

橋爪 ただ、ヨーロッパはアメリカのように個性的ではあるけれども、アメリカほどひどくはありません。アメリカの場合は、とにかく伝統がありませんか、いったん地域社会や家庭から抜け落ちると、もう犯罪以外に生きていく方法がないという人がたくさん出てしまうんです。それから考えると、日本も大丈夫なのかもしれません。

宮崎 アメリカの犯罪者に「なぜやったのか」と質問すると、「学校でやってはいけな」と教わらなかったから。教わってればやらなかった」と答えが返ってくる。それが本心だとすれば、それら恐ろしいというか。なんでも手取り足取り教えない、行動を律することができない

人格が破綻していても自立たない

橋爪 同じく教育が破綻していても、人格が破綻していても、

人間というのは、どうなんでしょう。

橋爪 逆に日本人の場合は、言われてないことは、とりあえずやらないで、他人と同じことをやっているだけ。だから、みんながやり始めたなら、突然、へんなことでもやってみようのかもしれない。

宮崎 その「みんな」というのが怖いんですよ。

も、日本の場合は自立たないわけです。

宮崎 そのほうが、表に現れないだけ怖いですね。

緑の眼

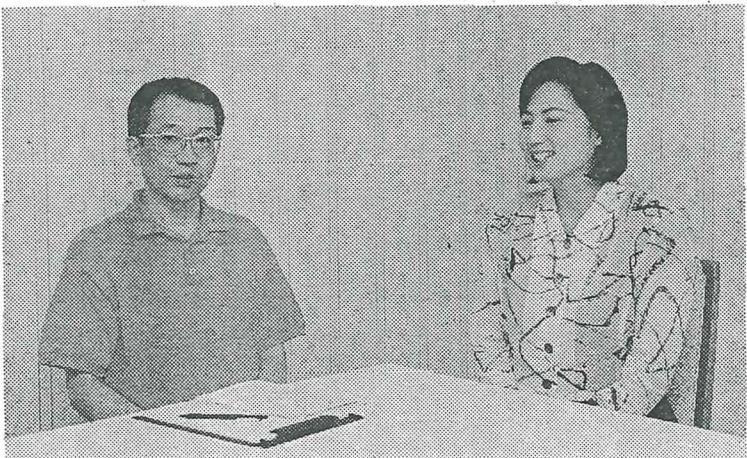
いっお会いしても、橋爪先生は毅然としていらっしゃいます。

「自身の中の価値基準がビシッと通っていて、多少の雑音などでは揺るがないという

イメージでしょうか。

だから、社会を見る目にブレがない。座標軸の上にきちんとポイントしてくださる、という感じです。

この対談は、元英国皇太子妃のダイアナさんのショックな事件が起こる前に行ったのですが、今度はぜひ、あのような世界的状況をどうご覧になっていらっしゃるのか、お話をうかがいたいと思います。



橋爪 もしも、一人一人が自分のからだを張って世の中を守っているという気が概があれば、こういう事件に負けてなるものかという反作用が起こってくるはずなんですけれどもね。自分の足で立っていないから、おびえてしまっ、おびえた方向に動いてしまう。

宮崎 逆に、からだを張って守ろうとする人が排除されてしま

宮崎 「総会屋の無言の圧力があつたから、お金を渡した」とかね。「何、それ？」ってがっかりしちゃいますよ。

いけないとは思いますが、ずつとやってきたことで、みんながやっていることだから、という発想はなんとかならないのですかね。

橋爪 本来、学問の世界でも、ジャーナリズムの世界でも、家庭でも、少数者が正しいということはよくあるわけです。そういう時に勇気をもって発言する。教育とは、そういう勇気を人々に与えることじゃないでしょうか。

(構成・関仁仁)

おまけ 毎日新聞

1997年(平成9年)6月15日(日曜日)

つてきたらどうにか立ち返り、その地

の問題をもとにどうしてその依

命題に著者は、まっすぐに向かい合

同時にジャーナリズムでもある

いにかれば、これはもう一つの

の尊厳を失うことなのだ。

育)は、私たちの生活は、

金保羅は、危機管理は、大学(教

えればいいのか。憲法は、日本の安

統治に対して、私たち日本人は、考

史を身失つたのか。過去の台湾、朝鮮

だか。なぜ、日本は自分の歴史

は、まっすぐをなぐしてしまっ

かなくなったのか。なぜ、日本人

なぜ、日本株式会社は、まっ

筋が通っている。

氏の「講義」は、きわめて明瞭で

理法のだが、前作同様どこでも橋

二年前に出された「橋爪大三郎

とどこにたつたのか。

のやつかいどころである。なぜ、

とどこが、この時代の、この日本

とどこが問題になってきている

時に、私たち自身の直接的でめき

ただの問題ではない。それと同じ

は知識人といつた国のリーダーた

政治家や官僚や企業家、あるいは

人ひとりにして発言ではない。

かかわらず、この判断と決断が、

判断を私たちに求めている。にも

なそのくせ長期の視野を含んだ

の事態が、きわめて具体的に緊急

い立ちついでに、一つひとつ

い事態の前で、私たちは手もな

問題も吹き出している。が、その

がった。それに伴うさまざまな矛盾や

日本は、あきらかに大きな曲の角を曲

ていく多くの人の異感だ。この時代は、

おぼろしく、これは、この時代を生

は、おぼろしく、これは、この時代を生

き「講義」には「前に」と題した前書

の冒頭で著者は書いている。「日本

い。そして、私たちが客を

けるための道筋が、そのための基本

的なきるの取り方が、だれでもわ

かる言葉で提示されている。

社会学者である著者は、第一の講座

を「社会科学を学ぶにあなたへ」と

題して、社会科学とは何か、その学問

としての歩みから解きあかすのだ

が、そこには象牙の塔(バウハウス)

の事象が、きわめて具体的に緊急

私たちが生きている社会の中で生か

す方法を問うている。それができて

この「社会学」だ、という思いが

ひたひたに透る。そのわけ、こ

ういふ道筋とした時代、転機期に

て、学問は学問として自己完結する

のでなく、むしろ時代をリードする

形でジャーナリズム的な働き

(後立舟)をしてほしい。

だからこれは、まさに学生に与え

る書といつた体裁は取っているが、

裏は、最も今日のな、そのい

未来的な、この日本という国家構想

していくための手がかりをもとに考

えるための論考集である。

「現代の日本人は、精神的に未熟

である。その思えば、その

れば、一人ひとりの人格のなかに

個人としての自己と、国民としての

自己とが、独立して存在してはい

からである。別の言い方をすれば、

西書を参照しているのは、歴史をわ

れが見失い、個人と国民を同時に自己

のなかに抱えておくことができないで

いるからである。歴史を失い、人間

とは、文化を失い、国家を失い、人間

いにかれば、これはもう一つの

命題に著者は、まっすぐに向かい合

つてきたらどうにか立ち返り、その地

の問題をもとにどうしてその依

るための入門書、といっているのかも

しれない。

日本という国を構想する道筋を示す

『社会科学に入る前』文字通

は、おぼろしく、これは、この時代を生

き「講義」には「前に」と題した前書

の冒頭で著者は書いている。「日本

い。そして、私たちが客を

けるための道筋が、そのための基本

的なきるの取り方が、だれでもわ

かる言葉で提示されている。

社会学者である著者は、第一の講座

を「社会科学を学ぶにあなたへ」と

題して、社会科学とは何か、その学問

としての歩みから解きあかすのだ

が、そこには象牙の塔(バウハウス)

の事象が、きわめて具体的に緊急

私たちが生きている社会の中で生か

す方法を問うている。それができて

この「社会学」だ、という思いが

ひたひたに透る。そのわけ、こ

ういふ道筋とした時代、転機期に

て、学問は学問として自己完結する

のでなく、むしろ時代をリードする

形でジャーナリズム的な働き

(後立舟)をしてほしい。

だからこれは、まさに学生に与え

る書といつた体裁は取っているが、

裏は、最も今日のな、そのい

未来的な、この日本という国家構想

していくための手がかりをもとに考

えるための論考集である。

「現代の日本人は、精神的に未熟

である。その思えば、その

れば、一人ひとりの人格のなかに

個人としての自己と、国民としての

自己とが、独立して存在してはい

からである。別の言い方をすれば、

西書を参照しているのは、歴史をわ

れが見失い、個人と国民を同時に自己

のなかに抱えておくことができないで

いるからである。歴史を失い、人間

とは、文化を失い、国家を失い、人間

いにかれば、これはもう一つの

命題に著者は、まっすぐに向かい合

つてきたらどうにか立ち返り、その地

の問題をもとにどうしてその依

るための入門書、といっているのかも

しれない。

橋爪大三郎著(夏目書房・2000円)

橋爪大三郎の社会学講義 2

豊泰 路子 評